

第7章

継続ボランティアの実態

七ヶ浜町ボランティアセンターの大きな特徴としてあげられるのは、長期滞在、あるいは継続して活動されたボランティアの存在だろう。彼らがどのような日々を送ったのか、我々はどのように彼らを迎えたのか、データやアンケートとともにお伝えしよう。

- 7.1 数字から見る継続ボランティアの動向
- 7.2 継続ボランティアへのアンケートより
- 7.3 団体、企業へのアンケートより

7.1 数字から見る継続ボランティアの動向

7.1.1 長期ボランティアたちの生活環境

この町で活動したボランティアは延べ人数約 76,480 人余 (平成 23 年 3 月 11 日～平成 25 年 12 月 31 日)。実に町人口の 4 倍に上る。

短期間の来町としては、町始まって以来の人数であろうか。

ボランティアには、

- ① 日帰り活動
- ② 数日間活動 (車中泊・テント泊)
- ③ 長期間活動 (車中泊・テント泊)

など、いろいろなパターンの活動スタイルがある。



長期滞在型ボランティア(テント泊:キャンプ場)

一日の活動を終え夕食の準備に取り組むボランティア。協同炊事で友情を深め合った。



町営キャンプ場

ボランティアセンターに隣接。テント場を提供し、長期の活動をささえて、多くのボランティアリーダーを生み出した。利用は登録が必要。1泊 300 円。

町のキャンプ場がボランティアセンターに隣接しており、長期滞在者にとっては絶好の立地であった。また、同様に車中泊者の駐車場も同じ敷地内であった。

サッカースタジアムのシャワールームの解放(要申請)や、水場・トイレなどがおおいに彼らの生活の便に供したのであった。

各種の記録から長期、継続ボランティアのライフスタイルに迫ってみよう。

7.1.2 有料道路の無料化制度はどう利用されたか？

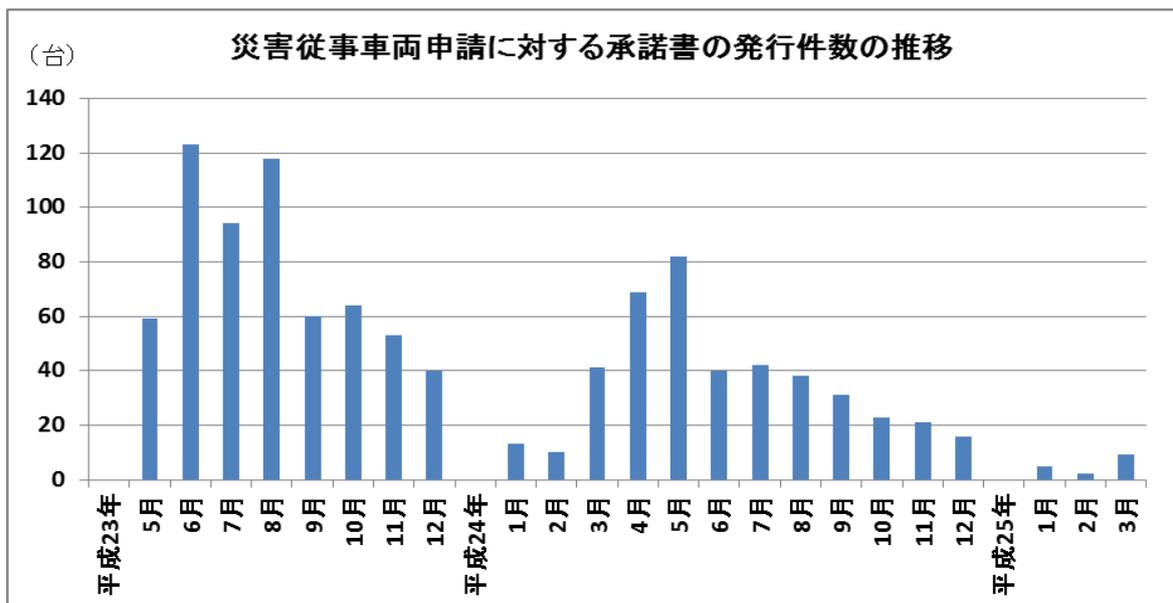
自治体では、東日本大震災に伴う被災地の救援・ボランティア活動等のために使用する車両に対して、災害派遣等従事車両証明書の発行を行い、証明を受けた車両は対象となる有料道路を利用する場合、料金を無料とする措置を受けることができた。



七ヶ浜町災害ボランティアセンターではこの措置を受けて、町でのボランティア活動者に対して、災害従事車両証明書の受領に必要な承諾書を発行した。

◆災害従事車両申請に対する承諾書の発行件数

年月	件数	年月	件数	年月	件数
平成23年1月		平成24年1月	13	平成25年1月	5
平成23年2月		平成24年2月	10	平成25年2月	2
平成23年3月		平成24年3月	41	平成25年3月	9
平成23年4月		平成24年4月	69	平成25年4月	
平成23年5月	59	平成24年5月	82	平成25年5月	
平成23年6月	123	平成24年6月	40	平成25年6月	
平成23年7月	94	平成24年7月	42	平成25年7月	
平成23年8月	118	平成24年8月	38	平成25年8月	
平成23年9月	60	平成24年9月	31	平成25年9月	
平成23年10月	64	平成24年10月	23	平成25年10月	
平成23年11月	53	平成24年11月	21	平成25年11月	
平成23年12月	40	平成24年12月	16	平成25年12月	
平成23年合計	611	平成24年合計	426	平成25年合計	16
				平成23～25年総計	1,053台



それによって料金が無料となり、ボランティアの経済的自己負担が軽減され喜ばれた。料金無料の措置は、第一期平成23年5月12日～9月10日・第二期9月15日～12月10

日・第三期平成23年12月11日～平成24年3月10日までと、順次延長された。

第四期への延長がなされないことを懸念した多数のボランティアは、仲間に声を掛け、10,945人の署名を集めて、継続の嘆願書（嘆願者・宮城県七ヶ浜町ボランティア有志一同）を宮城県災害対策本部に提出した。

その後、この措置は第七期まで延長され、平成25年3月31日をもって終了となった。

この制度の継続は、七ヶ浜を支援したいボランティアには大きな助けとなり、その甲斐あって平成25年12月末時点の活動者数は、延べ76,480人に上っている。

7.1.3 テント泊、車中泊のボランティアはどう推移したか？

震災直後から町外からボランティアの申し出が多数あったが、ボランティアの受け入れ体制が整った平成23（2011）年5月連休前後から、本格的な受け入れが始まり、町に数日間滞在してボランティア活動を継続したい方には、車中泊や野外センターのキャンプ場でのテント泊を認めた。そのために、受付をして滞在をきちんと把握し、トラブルの無いよう努めた。

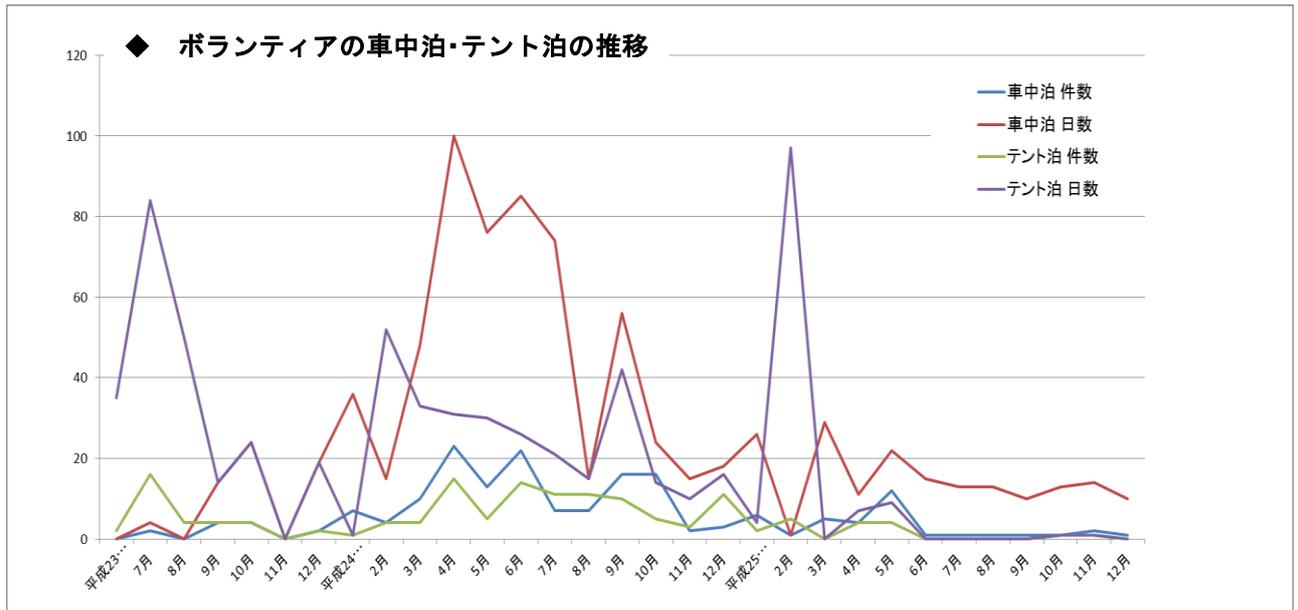
車中泊の駐車場やキャンプ場の利用は、平成24（2012）年5月より有料となり、施設を管理する総合型地域スポーツクラブであるNPO法人・アクアゆめクラブで申請する事となる。

月日とともに長期滞在のボランティアも増えてきた。それに伴い町では、このほかシャワーを無料で開放をした。また、震災後に営業を再開した民宿では、ボランティアの入浴のために風呂を無料開放してくれた所もあった。

ボランティアセンターと同じ敷地内にあった「きずな館」（レスキューストックヤード運営の宿泊施設）には、平成25（2013）年3月末の閉所までに、延べ8,000人が宿泊したということであった。

◆ ボランティアの車中泊・テント泊の推移

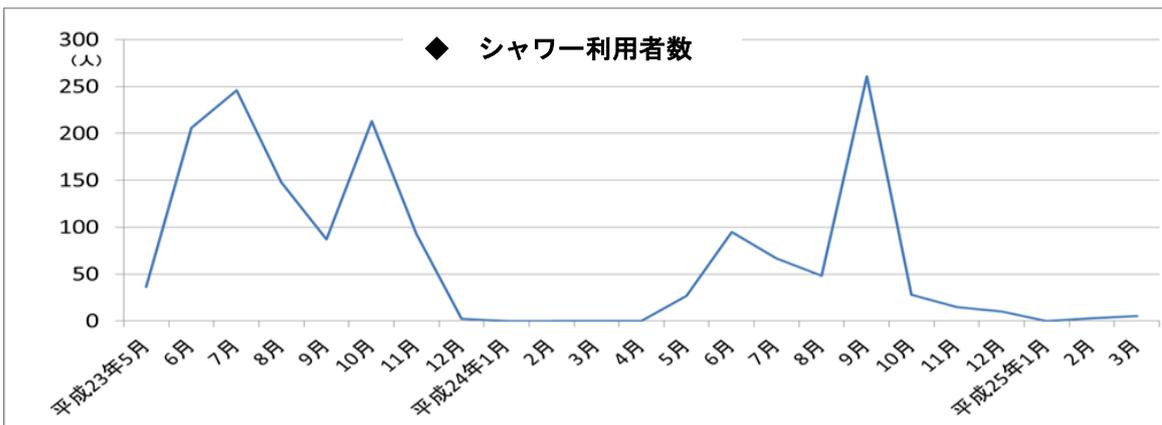
◆平成23年		3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	総合計		
車中泊	件数				0	2		4	4	0	2	12件		
	延べ日数				0	4		14	24	0	19	61日		
テント泊	件数				2	16	4	4	4	0	2	32件		
	延べ日数				35	84	50	14	24	0	19	226日		
月別合計	件数			0	0	2	18	4	8	8	4	44件		
	延べ日数			0	0	35	88	50	28	48	0	287日		
◆平成24年		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	総合計
車中泊	件数	7	4	10	23	13	22	7	7	16	16	2	3	138件
	延べ日数	36	15	48	100	76	85	74	15	56	24	15	18	562日
テント泊	件数	1	4	4	15	5	14	11	11	10	5	3	11	94件
	延べ日数	1	52	33	31	30	26	21	15	42	14	10	16	291日
月別合計	件数	8	8	14	38	27	27	18	18	31	25	4	14	232件
	延べ日数	37	67	81	131	106	111	95	30	98	38	25	34	853日
◆平成25年		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	総合計
車中泊	件数	6	1	5	4	12	1	1	1	1	1	2	1	36件
	延べ日数	26	1	29	11	22	15	13	13	10	13	14	10	177日
テント泊	件数	2	5	0	4	4	0	0	0	0	1	1	0	15件
	延べ日数	4	97	0	7	9	0	0	0	0	1	1	0	119日
月別推移	件数	8	6	5	6	16	1	1	1	1	2	3	1	51件
	延べ日数	30	98	29	18	31	15	13	13	10	14	15	10	296日
全期間の月別合計	全車中泊件数	13	5	15	27	25	14	12	21	21	4	6		186件
	全車中泊延べ日数	62	16	77	111	98	100	91	28	80	61	29	47	800日
	全テント泊計	3	9	4	17	18	7	23	11	19	14	3	13	141件
	全テント泊延べ日数	5	149	33	38	39	61	105	65	56	39	11	35	636日
												全宿泊件数	327件	
												全宿泊延べ日数	1,436日	



7.1.4 シャワーはどう利用されたか？

平成23年4月23日、NPO法人レスキューストックヤードの施設である「きずな館」が開所されたのにもない、名古屋からのボランティアバスで来町する団体の方々の為に、町民プールのシャワー室を無料開放した。

その後、夏の暑さと作業の大変さを考慮して、一般のボランティアにも開放したが、町民がプールを使用するようになり、混雑をさせて6月よりサッカースタジアムのシャワー室を利用する事となる。快適に使用する為にボランティア達が当番制で清掃し、使用方法をレクチャーして多人数が使用する事となった。無料解放は平成25年3月末をもって終了し、町民プールでの有料利用となった。



平成23年			3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
利用者数					36	206	246	148	87	213	93	2	1031人
平成24年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
利用者数	0	0	0	0	27	95	67	48	261	28	15	10	551人
平成25年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
利用者数	0	3	5										8人
合計	0	3	5	0	63	301	313	196	348	241	108	12	1590人

<七ヶ浜町社会福祉協議会 引地 淑子>

7.2 継続ボランティアへのアンケートより

7.2.1 継続ボランティアへのアンケートの実施

本報告書の作成にあたり、継続して七ヶ浜町ボランティアセンターに通い、活動を続けたボランティアに対し、活動の頻度、延べ活動日数、かかった費用、通いの手段、活動後の意見、感想等について、アンケートを実施した。

1. アンケートの実施時期

2013年11月～2014年1月

2. 実施方法

Google フォームで作成したアンケート項目を Facebook 上で共有し、回答を Google ドライブにてインターネットで回収する方法、ならびに、ボランティアセンターに於いて、来所するボランティアにプリントアウトを配布し、手書きで回答を求め、両者をエクセルのワークシート上に統合してデータベースとした。

3. 「継続ボランティア」の定義

「継続ボランティア」については、厳密な定義を下すのは不可能と判断し、活動が複数回にわたるか、あるいは長期に滞在して活動したボランティアという程度の自己判断による回答とした。

4. アンケートの回答数

・インターネット経由の回答	26件	
・直接提出の手書き回答	9件	合計 35件

確実に長期、継続ボランティアに該当し、アンケート実施時期に音信が途絶えているボランティアが数多くいる。顔や名前は把握しているものの、住所やメール等の連絡先が把握できずに、アンケートの依頼ができなかったボランティアは、おおまかな見積もりで40名位かと思われる。

7.2.2 アンケートの項目

アンケート項目は、以下の22項目とした（「*」は、回答が必須の項目）。実際の文面は、資料編「継続ボランティアのライフスタイルに関するアンケート項目」に掲載している。

1. ボランティアに行こうと決意したおもな理由（自由回答）*
 2. 七ヶ浜町を活動の場所として選んだ理由（自由回答）*
 3. 活動を長期間継続、あるいは、繰り返して参加した理由*
 - a. 被害が甚大でとても帰れる気持ちにはなれなかったから
 - b. ボランティアの仲間ができたから
 - c. 納得できる復旧の段階まで活動したかったから
 - d. 被災者と強いつながりができたから
 - e. ボランティア活動が楽しかったから
 - f. 自由な時間があったから
 - g. 最初から長期や継続的な活動を覚悟していたから
 - ・その他
 4. ボランティアスタイル*
 - a. 滞在型
 - b. 通い型（県外から）
 - c. 通い型（県内から）
 5. 「滞在型」の宿泊手段
 - a. テント泊
 - b. 車中泊
 - c. ボランティア用の宿泊施設利用
 - d. 一般の宿泊施設利用
 - ・その他
 6. 「滞在型」の活動回数（活動を何度行ったか）
 7. 「通い型」の交通手段
 - a. 鉄道（在来線のみ）
 - b. 鉄道（新幹線併用）
 - c. 長距離バス
 - d. ボランティアツアーバス
 - e. 自家用車
 - f. バイク
 - g. 自転車
 8. 最初に活動した時期（おおよその日付）*
 9. 最後に活動した時期（おおよその日付）*
 10. 七ヶ浜での活動日数の合計*
 11. ボランティア活動にかかった費用（万円単位）*
 12. ボランティア活動の費用の負担先*
 - a. 全額自己負担
 - b. ほぼ自己負担、一部企業団体等からの補助
 - c. 企業団体等からの補助と同等程度の自己負担
 - d. ほぼ企業団体等からの補助、一部自己負担
 - e. 全額企業団体等からの補助・その他
 13. ボランティア活動に際し、嬉しかったこと、感動したことなど（自由回答）*
 14. ボランティア活動に際し、困ったこと、嫌な思い、不満に感じたことなど（自由回答）*
 15. 当ボランティアセンターの運営について、よかった点、悪かった点（自由回答）*
 16. 東日本大震災以前の災害ボランティア経験の有無。災害名と活動地*
 17. 東日本大震災時の他のボランティアセンターでの継続活動の有無と活動地*
 18. 継続してボランティア活動をするために大切だと思うこと（自由回答）*
 19. 年齢*
 20. 性別*
 21. 職業*
 22. 氏名（任意）
- <以上>

7.2.3 回答の分析（項目順）（敬称略）

アンケートの項目順に集計および感想等を記すが、スペースの関係で回答の全文は紹介できない。自由回答に関しては、スペースの制限があまりないウェブ上のアンケートフォームでの回答もあるため、さまざまな思いをつづった長文の回答も多かった。一応回答件数も記すが、集計者の判断で文意をくみとったものであり、正確な数字ではない。それぞれいくつかの回答文を短縮して記載している。また、ここに拾えなかったボランティアの生の声がある。自由回答の回答全文を資料編「継続ボランティアのライフスタイルに関するアンケート回答」に掲載しているので、参考にしてほしい。

NO.1 ボランティアに行こうと決意されたおもな理由は、どのようなことでしたか？

① 地元、故郷、縁の地に対して役に立ちたかった（11件）

地元、故郷、親類がいるなど、土地やそこに住む人々に対する思いから参加を決意したという回答が多かった。この回答の中には、②として以下に抽出する「何かせずにはいられなかった」という思いも込められているかも知れない。（以下、回答より）

- ・東北出身で、宮城県名取市に自宅があり、とてもとても他人事ではない大震災であったこと。そして、当日当夜、東京勤務のため、被災地から離れて暮らしていたことで、多くの親戚・知人が心配だった。そして、自分の故郷に対して、自分個人としてできることをできる範囲でしようと思いついた。（40代、男性、会社員）
- ・海外に住んでいて、自分の出身地であり家族が住む地域が被災したのを見て、居ても立っても居られなくなり、最初は2011年の5月に来ました。その後は里帰りの度に来ています。（30代、女性、会社員）
- ・自分の住んでいる町が壊れてゆくさまを目の当たりにし、できることを考えた（その時には、たいていの家々が停電していたが、勤務先が発電機能を持った施設だったためTVを見てもしまった）。また、親戚（閑上）の家がなくなった。（40代、女性、会社員）

② 何かせずにはいられなかった（8件）

それぞれの思いが吐露されており、簡単にまとめることはできないが、被害規模の大きさを感じ、「何かせずにはいられない」「募金だけでは気が済まない」などという気持ちが強かったことが伺われる。（以下、回答より）

- ・多くの方が被害に合われている。これだけの災害に対して、何かせずにはいられなかったから。（50代、男性、自営業）
- ・募金活動に参加するだけでなく何か私でもお力になれることはないかと考えていたところ、勤務先で七ヶ浜に伺い復興支援のためのボランティア参加者を募集していたので参加しました。（40代、女性、会社員）
- ・あの日の夜、東京で帰宅難民になり、馴染みの店で朝まで繰り返し繰り返し津波で破壊されて行く街並みを観ていました。その時に一人の日本人として小さな瓦礫の一つでも拾いに行かなければと決心して。（50代、男性、会社員）

③ 会社で支援活動の募集があったから（4件）

決意に至る気持ちの変化や決意の個人的な背景に加えて、活動に参加する直接のきっかけに触れた回答も何件もあった。その中で会社での募集に応募したという回答が4件、そのほか、バスツアーの案内を見て、被害を伝える新聞の記事を見てなどの回答もあった。

- ・きっかけは、会社主催のボランティア活動でした。それまでは、ボランティアの『ボ』の字も意識していませんでしたが、会社からの募集に気付かされ「被災地に暮らしていて、自分は何不自由ないのに何してたんだ！」と。（50代、男性、会社員）
- ・敢えて言うなら東日本大震災では、その被害規模と赤ん坊が流されたたとニュースで聞いて。（40代、男性、会社員）
- ・自閉症の子供が避難所に行けず（集団の中では不安感が強くてパニックになってしまうので）家族で車の中で生活している、という新聞の記事を読んで、障害者のために役立ちたいと思って。（50代、女性、無職）

NO.2 なぜ、七ヶ浜町をボランティア活動の場所として選ばれたでしょうか？

① 会社の先、ツアー先だったから（13件）

初回は会社単位で募集するボランティアの活動先だったことや、たまたまボランティアツアーの行き先が当センターだったことが大きいようだ。なぜ企業やツアー会社が七ヶ浜を活動の拠点としたかは、本章3節の「団体、企業へのアンケートより」などを参照されたい。

- ・初回は勤務先での参加だったため。初回参加して七ヶ浜のボランティアセンターの方にお話をお聞きし、中学生の娘でも参加可能なことが分かったため。（40代、女性、会社員）
- ・メモリー（旅行）の行き先が七ヶ浜だったから。あとは、長瀬悦子さんがいらしていたのと、なにより、ボラセンスタッフはじめ、皆さん暖かい方々ばかりだったから。（30代、男性、会社員）
- ・会社（NTTコミュニケーションズ）の復興支援活動の選定場所が七ヶ浜町であった。社の選定理由は、先遣部隊が東松島と七ヶ浜を視察し、①従業員の安全確保、②首都圏からのアクセス、③VCの受け入れ対応を重視し七ヶ浜にしたと聞いている。（40代、男性、会社員）
- ・インターネットなどで検索し、大学生協という団体でボランティアを募集していることを知りました。（略）ボランティア活動をしていた地元の高校生たちは学校が始まるということで、七ヶ浜町で団体として初めて受け入れていただきました。（20代、男性、学生）
- ・長電ボランティアツアーで初めてボランティアに参加しましたが、その活動場所が七ヶ浜でした。（30代、男性、医療従事者）

② 地元だから、縁のある土地だったから（11件）

当然のことながら、地元や周辺の方は継続的に活動に参加されている。そのほか、親類縁者が住んでいる、かつて住んでいた、思い出の地であるなど、縁のある土地だからという回答も多かった。

- ・前に七ヶ浜に住んでいましたから特に七ヶ浜を手伝いたかった。（30代、男性、会社員）
- ・陰ながら七ヶ浜の知人を応援したいとの思いから……。 （50代、男性、無職）

- ・（略）多聞山を訪れた際、景色の素晴らしさに感動した。（略）国際村へ行き、展望台から見た海と砂浜のキレイさに感動した。その後は七ヶ浜町が気に入り、毎週、土日祝日は七ヶ浜で海釣りをしていたので（略）（40代、男性、公務員/団体職員）
- ・多賀城（知人、息子が住んでいた）に始まり、仙台（泉東）と活動したが、落ち着いて来た（実際には、活動が制限されてボランティアさんが余るような状況になっていた）ため、近場の七ヶ浜に活動の場を移しました。（70代、男性、無職）

③ 受け入れ体制がととのっていた、しっかりしていた（9件）

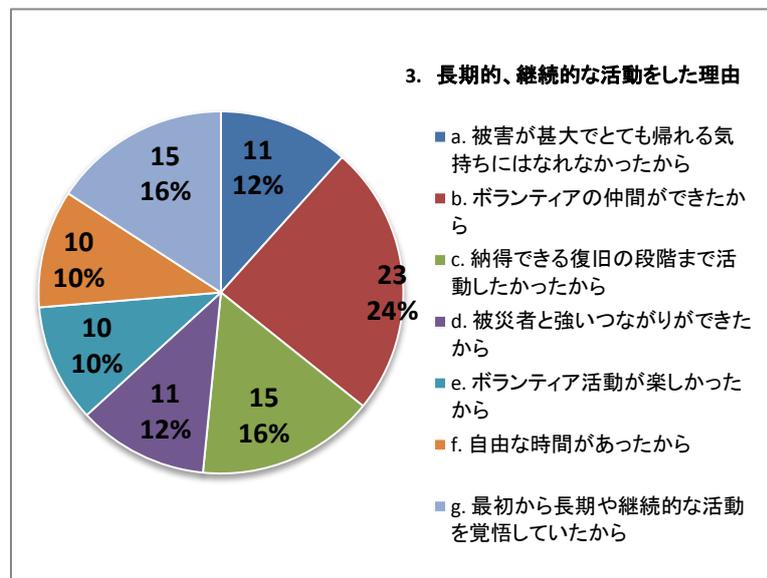
回答には、情報提供、個人活動への対応、問い合わせの応答など、初回の活動場所選定する際に、受け入れ体制のよさを感じたという回答と、一度活動した後に、受け入れ体制の充実を実感して活動を継続した、という回答が混在しているが、全般的に情報が開示され、運営がスムーズに行われていることが評価されているようだ。

- ・比較的情報が入手しやすかったこと。また、自分の適正にあった仕事（ブログアップの仕事など）が用意されていたから。（50代、男性、自営業/フリーランス）
- ・（略）最初は石巻から、多賀城、塩釜、仙台など回りました。（略）ネットで調べて行きました。七ヶ浜もその一つでしたが、ボランティアセンターの仕組みがともしっかりしていて、仕事をしやすかったので一番回数が多くなりました。（50代、女性、会社員）
- ・ゴールデンウィークの多忙な時期にも関わらず、受け入れてくれたのが七ヶ浜町だったからです。（40代、男性、会1社員）

NO.3 ボランティア活動を長期間継続されたり、繰り返し参加されたりしたのは、どのような理由からでしょうか。

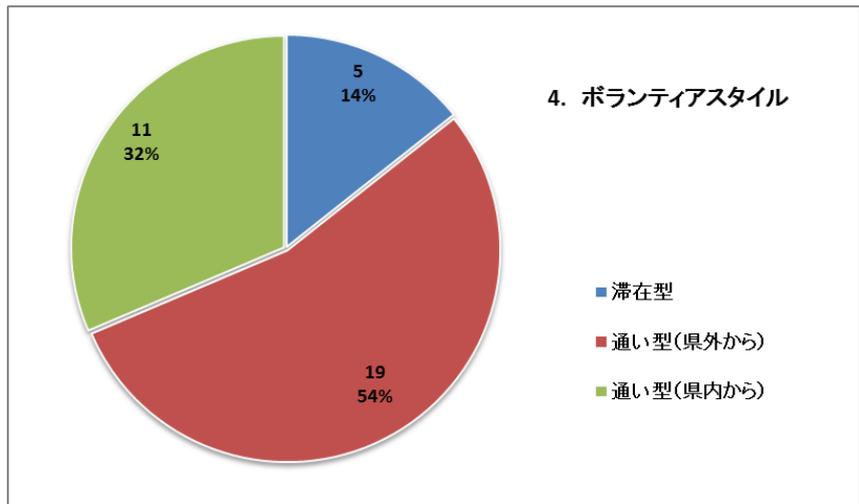
複数回答を可としたこともあり、比較的回答が分散している。活動の長期的な継続を可能にする要因として、とくにボランティア仲間の形成があげられるようだ。

次に、「納得できる復旧の段階まで活動したい」が挙げられているが、そこには自分の活動の成果を実感したい気持ちも含まれているのではないかと。



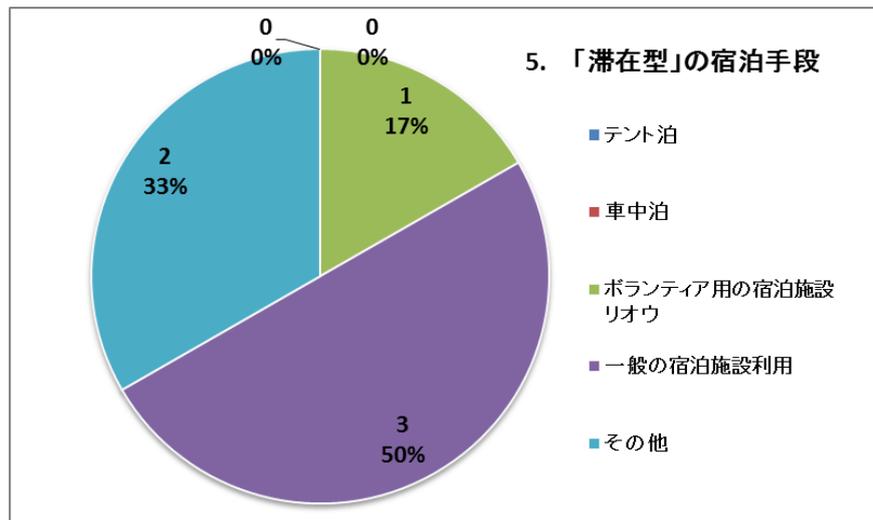
NO. 4 あなたのボランティアスタイルをお教え下さい。

ボランティアの参加スタイルでは、県外からの通い型が過半を占めた。



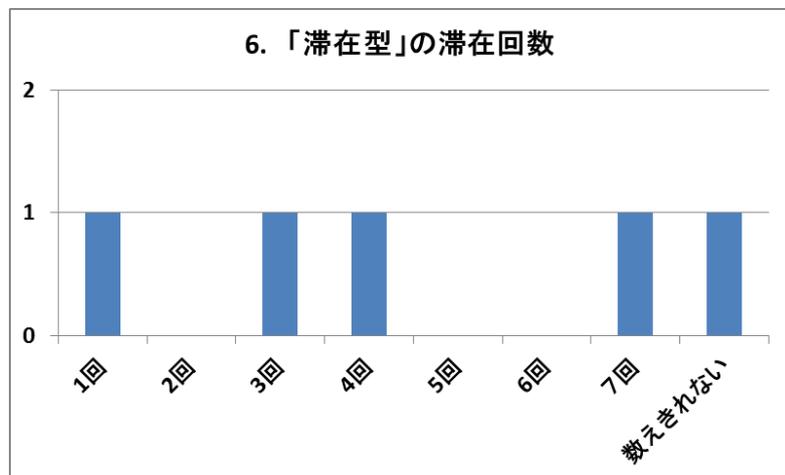
NO.5 「4」で「滞在型」と回答された方は、宿泊手段をお教え下さい。

サンプル数が少ないが、滞在型では、一般の宿泊施設の利用が過半となった。



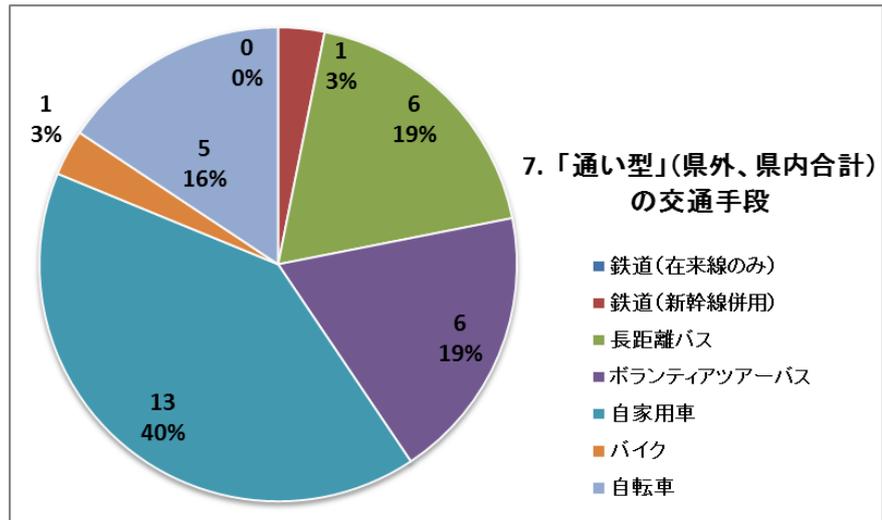
NO.6 「4」で「滞在型」と回答された方は、滞在は、何度ありましたか？

滞在型の滞在回数は、右の通り。サンプル数が少なく、「1回」の捉え方が各人でことなるかもしれない。

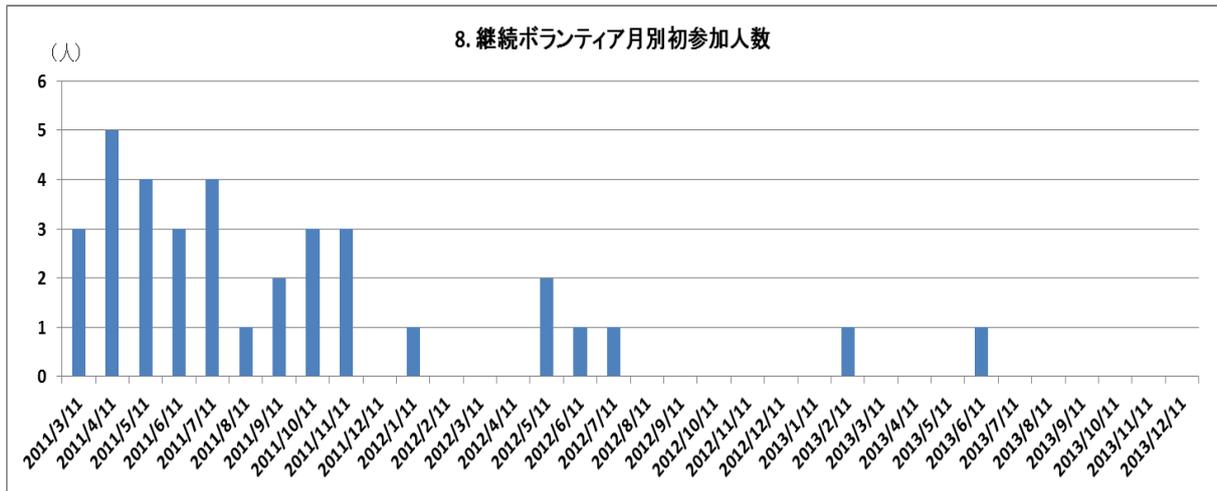


NO.7 「4」で「通い型」(県外、県内いずれも)と回答された方、交通手段をお教え下さい。

通い型の交通手段は、自家用車が多かった。鉄道は在来線と新幹線併用を合わせて、自家用車に迫る程度。自転車利用の活動者も多かった。やはり、継続ボランティアということになると、地元の人の比率が高くなるようだ。



NO.8 セケ浜ボランティアセンターで最初に活動されたのはいつですか？



5月の連休と夏休み前半に、初めて訪れている人が多いようである。

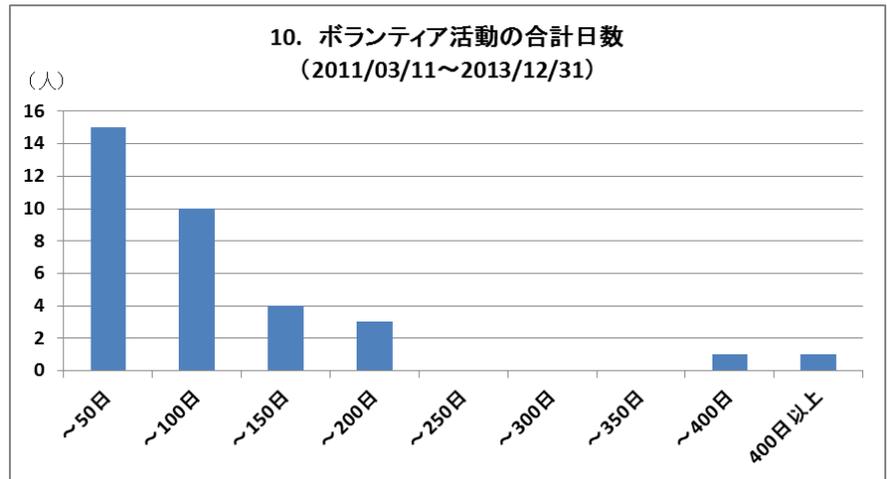
(※) 横軸の日付、2011/3/11は、2011年3月11日から4月10日までの1か月を表す。以下同様。

※ No.9の「セケ浜ボランティアセンターで最後に活動されたのはいつですか？」は、不明な回答が多かったため、集計は行っていない。

NO.10 これまで、七ヶ浜でのボランティア活動の合計日数を教えてください。

有効回答 34 件。50 日までの人が多いが、51 日～100 日の人が 10 名と、多いことにも注目したい。101 日以上が 9 人で、うち 350 日、400 日を超える活動をした人が各 1 名。

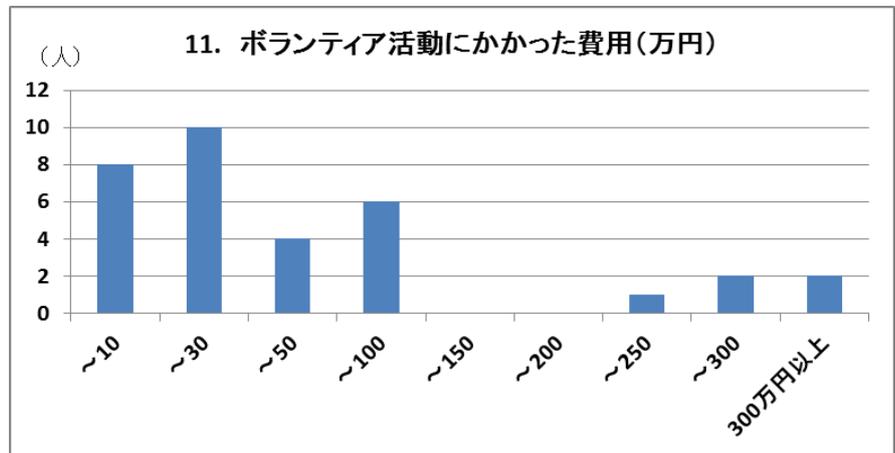
平均は 93.4 日であった。



NO. 11. ボランティア活動にかかったと思われるおおよその費用をお教え下さい。

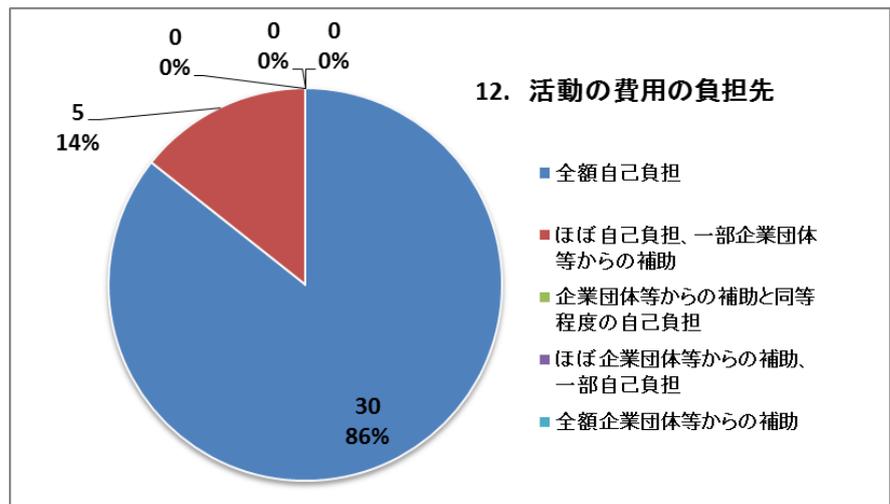
有効回答 33 件。30 万円までの人が 18 人で過半を超える。ただし、200 万円を超える人が 5 名。

平均は、61.1 万円であった。



NO. 12. ボランティア活動の費用の負担先をお教え下さい。

86%の人が全額自己負担で、残りもほぼ自己負担という結果。企業、団体等からの補助はあまり利用していないことがわかる。



NO.13 ボランティア活動そのものについて伺います。ボランティア活動に際し、嬉しかったこと、感動したことなどをお知らせください。

ほとんどが、「役に立ったことが実感できたとき」や「同じ目的を持つ仲間ができたこと」に言及したものであった。

① 役に立っていることが実感できたとき（16件）

初回は会社単位で募集するボランティアの活動先だったことや、たまたまボランティアツアーの行き先が当センターだったことが大きいようだ。なぜ企業やツアー会社が七ヶ浜を活動の拠点としたかは、本章「7.3 団体・企業へのアンケートより」を参照されたい。

- ・国際村の集会所を訪問時、毛糸を持参しました。（略）帰宅し、しばらく経ってから仮設の方から毛糸で編んだ帽子とマフラーが送られてきました。感動し涙が出るほど嬉しかったです。（50代、女性、会社員）
- ・地元の方々の笑顔を見られるのが一番嬉しい。（40代、男性、会社員）
- ・七ヶ浜の海岸がきれいになり、菖蒲田浜で海まつりを行うことができたこと。自分も活動させていただいた農地（畑・田圃）が復旧に向かい、作物が育ち、収穫した作物を食べることができたこと。（20代、男性、学生）
- ・泥カキに入ったお宅が、再建されお呼ばれされたこと。名前もガムテープでしか貼っていないような人間に、(作業先の家主さんの家が)落ち着いたらいつでもいいからまた来てね、と声をかけられた。（40代、女性、会社員）
- ・始めて七ヶ浜を訪れた初めての現場(吉田浜の個人宅)でお会いした家主のお婆さんの前向きな笑顔に元気をいただき、帰り際に涙を流しながらお礼だと握手された時。（50代、男性、会社員）

② ボランティアの同志として仲間になり、また再会できたこと（9件）

周囲からの活動への評価や役に立っているという実感に加え、ボランティア同志の出会い、結束、再会のよろこびが継続活動の大きな力になっていたようである。

- ・ボランティアセンターの方に親切にいただいたこと。仲間が出来たこと。無力な自分たちでも必要とされていることが分かったこと。（40代、女性、会社員）
- ・同じ気持ちで自分の時間を復興ボランティア活動に費やす仲間が出来たこと。（略）地道に実現する人間一人ひとりのまとまった時のチカラを実感できたこと。（40代、男性、会社員）
- ・活動を通じて、普段知り合えない方々とつながれたこと。（30代、男性、会社員）
- ・同じ目的、同じ方向に向かって活動する仲間がたくさん出会えたこと。（30代、男性、公務員/団体職員）
- ・多くの方々がボランティアに来てくれること。多くの出会い!!（70代、男性、無職）

NO.14 ボランティア活動で、困ったこと、嫌な思い、不満に感じたことをお知らせください。

回答しづらい設問だが、その回答の中でもリーダーレベルのボランティアからは、反省点もふくめ、様々な問題点が指摘されている。その幾つかは、項の最後に囲み記事としてまとめている。

① 特になし（13件）

② 心構えの不足、マナー違反を見たとき（8件）

次項「身勝手な振る舞い」にも該当する回答があるが、一応、「心構えの不足、マナー違反」として8件を抽出した。そのいくつかを以下に記してみる。

- ・震災当初ボランティアに来ているのに写真を撮られる方、装備が不十分でケガをする方、装備をセンターから借りれば良いと考えて参加する方を見かけた。（40代、男性、会社員）
- ・年月がたつにつれて、ボランティアの質が下がってきているように感じる。意識というか、マナーとかが。（30代、男性、会社員）
- ・某団体の行動に辟易しました。せっかく分別したものを全て一緒にして海岸に捨てる。ボランティアセンター関係なしに活動していたこと。その団体にお金を貸し、いまだに返金がないこと。（30代、男性、公務員/団体職員）
- ・被災者本位の活動ではなく、自分の利益だけで活動する人と一緒になったとき（40代、男性、会社員）

③ 身勝手な振る舞い、ボランティア同士のごたごたを見たとき（7件）

活動に参加した団体、スタッフ、被災者などの間に軋轢が生じることは、ある程度避けられないと思われるが、それを目撃したボランティアは、活動の現実と理想とのギャップに傷つけられるようだ。

- ・NPO、団体、個人、地元の方々の間でいざこざが起きたのを見た時。地元の人達を上から目線で見たりするのを目の当たりにした時。（40代、男性、会社員）
- ・七ヶ浜の復旧・復興という同じ目的に向かって活動しているのに、団体や個人間での考え方、活動の仕方の違いが原因で問題になってしまったこと。（20代、男性、学生）
- ・身勝手な行動を取るボランティアさんがいたことに不満を感じた気持ちが嫌でした。そんな行動も容認して活動を広げて行くことが大切であった。（70代、男性、無職）

● あるボランティアリーダーからの回答（1）

- ・被災地ということを利用し、人をだますような行為・それに加担した団体があったこと。
- ・それぞれの地域のやり方があるにもかかわらず、自分の工程を押し通そうと活動されたこと。
- ・家屋を再建する・しないにかかわらず、荒い作業を行われたこと。
- ・被災した家屋内に泥で落書きがされてあった（明らかに被災地観光的なものなので、ボランティアの活動行為とは異なりますが……）。
- ・時間がたつにつれ、あの光景がなくなり恐ろしさ・恐怖が消えた景観内でのボランティアの態度の豹変。危機感がなく、ただの空き地感覚で立ち小便をする連中が増えた。

（ボランティアリーダー、40代、女性、会社員）

● あるボランティアリーダーからの回答（2）

- ◇ 提案したかったが、遠慮して言えなかったこと。（2011年）
 - ・スタッフによる現場活動模様の撮影記録。
 - ・ボランティア参加者データベース作成。
 - ◇ 現場作業リーダーを依頼されることに対して感じていたこと。
 - ・誇り。信頼を裏切らないための緊張感も大きかった。
 - ◇ 現場作業リーダーをしていて困ったこと（＝注意していたこと）。
 - ・現場作業中
 - －他現場のリーダーが当日リーダーの駄目出しをしていた事があった。
 - ・センタースタッフ、町民ボランティアとのやりとり
 - －現場での緊張感を屋内スタッフに崩された事があった（笑）。（2012年）
 - ・個人、団体ボランティアさんとのやりとり
 - －指示を聞かない御年輩。（遠方からの使命感に燃えた方に多かった）
 - －体験型の大学生。（高笑い、瓦礫もってVサイン写メ、履歴書ねらい、出会い狙い）
- （ボランティアリーダー、40代、男性、会社員）

● あるボランティアリーダーからの回答（3）

- （いい面もあるし、ごく一部の人だということを前提に。）
- ・「内輪の盛り上がり」、「先輩面するリピーターのボランティア」、「身勝手な振る舞いをする方」が醸し出す空気感を調整するマネジメントに苦勞した。
 - ・とくに身勝手さは、本人に他意はないにせよ、辟易した。
 - ・震災直後は自称アーティストが続々と集まり、演奏させると迫ってくることが多かった。静かにして欲しかった。
 - ・「おれはボランティアなんだ！」と威張ったり、運営に細かく指導しようとしたりするタイプの方も結構いた。
 - ・アドバイスとしては非常にありがたいが、見当違いの批判になると、手に負えない場合があった。
- （ボランティアリーダー、30代、男性、会社員）

NO. 15 セブ浜町のボランティアセンターに対するご意見を伺います。運営について、よかったと思う点、悪かったと思う点をお書き下さい。

全回答 35 件中、31 件が何らかの「よかったと思う点」を指摘している。ホスピタリティー、組織運営、活動等に関して高く評価している。その一方同じ回答の中で、課題点として「悪かったと思う点」も併記するものもあったので、それぞれを上げる。また、前項同様、ボランティアリーダーからのまとめがあったため、この項の最後に囲み記事として掲載する。

① よかったと思う点

・気配り、ホスピタリティー

- ・抑制が効いていて、気配りがあって、すばらしいと思いました。（50代、男性、自営業/フリーランス）
 - ・新しい人が来るときに簡単にはじめられる。（30代、男性、会社員）
 - ・どの活動現場でも必ずボランティアリーダーが立ち会っていたこと。また、常に家族を迎え入れるかのような雰囲気でボランティア参加者に接してくれたこと。（50代、男性、公務員/団体職員）
 - ・女性のスタッフがほとんどで、とても優しく接していただきました。やはり女性ならではのホスピタリティーで老若男女問わずとても活動しやすいところだと思います。また、社協ーボラセンRSY(レスキューストックヤード)ーボランティアリーダーとがうまく連携し、運営がしっかりしていて、安心して活動できます。（40代、男性、会社員）
 - ・まとまりがあったこと、暖かい雰囲気があったこと。スタッフ間の連携がとれていて、非常にスムーズに活動できたのはよかったと思います。（30代、男性、会社員）
 - ・システムがしっかりしていただけてだけでなく、皆さんが挨拶してくれたり、ありがとうと声をかけてくれたり。思いやりがとても表に出ているボラセンでした。（30代、女性、会社員）
 - ・気安く声を掛けて頂ける、心配して頂ける。些細な事でも安心して参加できる雰囲気だと思います。（50代、男性、会社員）
 - ・どんな人に対しても平等であること。人のさばき方が上手。（40代、男性、会社員）
 - ・人間関係が素晴らしい。（70代、男性、その他）
 - ・ボランティアさんに対しても、住民の方に対しても、良く聴き良く教えて相手の立場で対応して頂ける。反応も速い。（70代、男性、無職）
 - ・雰囲気の良さ。ボランティアに対しての感謝の気持ちの強さを感じるところ。むちゃぶりも含めて楽しいと思えるところ。（30代、男性、会社員）
- #### ・組織運営、活動
- ・リピーターボランティアさんの意見を聞いてそれを取り入れる体制だった事。（40代、男性、会社員）
 - ・上手にゲマインシャフト化できた点。仲間意識の醸成がうまく、表現は悪いが、「集客能力」は素晴らしかった。（30代、男性、会社員）
 - ・運営がしっかりしていて、設備、機材も整備されていてボランティア活動しやすかったです。（40代、女性、会社員）

- ・ボランティアにやってほしいことが一目瞭然。仕事しやすい。(50代、女性、会社員)
- ・「おらほのラジオ体操」をみんなでやって、誰かが代表して今日の一言を言っていたこと。(50代、男性、無職)
- ・まず、まとまりがあること。リピーターのボランティアさんに各作業チームのリーダー人員として活動してもらっていたこと。車や資材が豊富だったこと。ボランティアバスや企業ボランティアなどの大規模人員の受け入れに積極的だったこと。(40代、男性、会社員)
- ・RSY(NPO法人レスキューストックヤード)がすぐに入ったこともあり、センターの方々の動きが非常に良かったと思います。マッチングもスムーズでしたし。(30代、男性、公務員/団体職員)
- ・外作業ではリーダー・サブリーダーの方がいることで初めてでも活動しやすかったです。(20代、男性、学生)
- ・初期段階でも、県内外問わず受け入れされていたこと。初期、地域の中学生・高校生が率先して、運営に参加していたこと。(略)7VCは私がお邪魔した中ではしっかり運営指示・分担がなされていたと思います。(40代、女性、会社員)
- ・ミーティングが毎週行われていて、今、ボランティアに何が求められているか、今後の活動はどのようになるか、理解できた、また私たちの意見も取り入れられるという運営は、良かった。(50代、女性、無職)
- ・大量のボランティア活動希望者を受け入れることが出来るコーディネート力。(50代、男性、公務員/団体職員)
- ・そのほか
- ・ボランティア受け入れの懐の深さに感謝しています。(50代、男性、会社員)
- ・知っている範囲ではボラセンとして一番の理想型ではないでしょうか？(40代、男性、会社員)

② 悪かったと思う点

- ・リーダーミーティング中、脱線が多い事。(40代、男性、会社員)
- ・ビジョンの無さ、マネジメントの不在。アメルバ型組織として充分機能していたという珍しいケースだが、強いて言えば、そこに確固たるビジョンやゲゼルシャフト的要素があればよかった。(30代、男性、会社員)
- ・ある点自由さが無い。(50代、女性、会社員)
- ・もうちょっと七ヶ浜人が加わったら(よかった)。(30代、男性、会社員)
- ・ただ1年過ぎた辺りから常連の参加者等で怪我が目立ち、注意が不足し、油断している姿がちらほら見受けられた。(40代、男性、会社員)
- ・ただ、それ(気持ちよく作業できるような配慮)に甘んじていた人間もおり、ワガママ、支援物資の私物化などを行っている者に対し、注意できなかったことが悪い点だと思っています(その者の人間性の問題であることは十分理解しています)。(40代、男性、公務員/団体職員)

・こうすればと思うのは、ガレキの撤去だけではなく、もっと農業支援や漁業支援など町の直接的な復興支援も行えればさらによかったかなと思います。(30代、男性、医療従事者)

● あるボランティアリーダーからの回答(4)

・よかったと思う点

- ・思いやり（自身が被災した状況でありながらのボランティアの達成感を損なわない配慮。たとえば、節度ある行動を促しながらの被災者ニーズへの橋渡しの妙には感服）
- ・即断即決（役所の伺いを待たず正しい信念に基づき、スピーディな判断）
- ・柔軟な対応（他者の意見を柔軟に取り入れる懐の深さと改善実行力）
- ・安全配慮（力を抜かせつつ緊張感を持たせられ、かつ集団をマネジメントできる現場リーダーを選抜）
- ・ゴール意識（30分単位、3日単位、3週間単位といった短期・中長期的なゴールを意識したマネジメント）
- ・謙遜とリレー（謙遜と感謝の姿勢。道具洗浄オペレートに代表されるリレー意識）

・悪かったと思う点

なし

(ボランティアリーダー、40代、男性、会社員)

● あるボランティアリーダーからの回答(5)

・よかったと思う点

- ・初期段階でも、県内外問わず受け入れされていたこと。
- ・初期、地域の中学生・高校生が率先して、運営に参加していたこと。
- ・7VC（七ヶ浜町災害ボランティアセンター）は、私がお邪魔した中ではしっかり運営指示・担当がなされていたと思います。

・悪かったと思う点

- ・当初現場までの地図が、7VCから現場までではなく、地元の人しか分からないピンポイントの地図だったこと。
 - ・結果的に良くなかったになってしまいますが、黄色い屋根クラブ的喋り場・飲酒場はよくなかったかなと。(私も加担していました。反省しています。)
 - ・昼休みの休憩中のイベント（コンサートとか）は、控えるべきかな、と思いました。
- ※休憩は休憩で。ボランティアとして活動している人を応援しに歌いにくるのも、ボランティア同士として気持ちはよく分かるので、結局見に行かざるを得ない状況に……。そのため早飯・寝なしで午後の活動に支障が……。気持ちはありがたいんですけどね。

(ボランティアリーダー、40代、女性、会社員)

NO. 16 ボランティア活動のご経験について伺います。東日本大震災以前に、災害ボランティアの経験はある方は、災害名と活動地を教えてください。

震災前にボランティア活動の経験があるのは、35名中6名で、2割に満たないことがわかった。

震災前にボランティア活動の経験がある人	……………6名／35名中
震災前にボランティア活動をした場所	……………7箇所
（内訳）阪神淡路大震災（1995年）	……………2名（宝塚市、神戸市）
東海豪雨（2000年）	……………1名（名古屋市西区）
新潟県中越地震（2004年）	……………2名（長岡市、場所不明）
新潟県中越沖地震（2007年）	……………1名（長岡市）
秋田・岩手県境大雨洪水災害（2010年）	……………1名（場所不明）
（サンプル数 35名）	

NO. 17 東日本大震災時に、他のボランティアセンターで長期または継続的に活動した方は、その場所を教えてください。

半数以上のボランティアが他の地区で活動していることがわかった。そのほとんどは、長期、もしくは、継続して他でも活動をしている。活動場所については、長期、短期、まとめて以下に列記する。

- ・東日本大震災時に他のボランティアセンターで活動経験のある人
- ・長期、継続……………17名／35名中
- （内訳）
- ・短期……………3名／35名中
- ・活動場所
- <岩手県> 宮古市、釜石市
- <宮城県> 気仙沼市、南三陸町、石巻市、松島町、塩竈市、多賀城市、仙台市（泉区、宮城野区を含む）、名取市（閑上地区を含む）、岩沼市、亘理町、陸前高田市
- <福島県> 新地町、南相馬市（原町、鹿島、小高、各地区を含む）二本松市（浪江町仮設住宅）、
- <長野県> 栄村（長野県北部地震被害）

NO. 18 今後の災害ボランティアについてご意見を伺います。継続してボランティア活動をするためには、どんなことが大切だと思いますか？

回答は非常に多岐にわたった。自由回答による文章から、カテゴリ分けしてカウントしてみた結果、以下のような結果になった。

・使命感・強い気持ち(8件)

- ・ MVP (ミッション=使命感、バリュー=価値観、プライド=活動への誇り)。これを維持するには、こう言うと身も蓋もないけど、他者からの認知と賞賛が必要。(30代、男性、会社員)
- ・ 復興の時まで維持できる強い気持ち。(30代、男性、公務員/団体職員)

・情報発信、ネットワークづくり(8件)

- ・ ウェブサイトはすごく大事です。どうやって震災の場所にきたり、何かができるが分かったり、いろんな情報を持てば安心です。(30代、男性、会社員)
- ・ メルマガやブログ、Facebookなどの継続で、今まで来てくれたボランティアさんたちに今の七ヶ浜を伝えること。(30代、女性、会社員)
- ・ 被災地がボランティアを必要としている状況を、ドンドン発信しなければ、復興の一側面だけを見て『大丈夫』と誤認する人は多いと思います。(50代、男性、会社員)

・謙虚さと感謝の気持ち(7件)

- ・ 地域、地元のニーズに対して敏感に反応する姿勢と順応性。／・作業だけではない、心の支援活動への理解と協調。／・人と比べず、自分の出来る範囲で、自分の出来る事を行う謙虚さ。／・自分が活動させていただくという、感謝の心(40代、男性、会社員)
- ・ ボランティアはあくまでニーズに応えるものであり、決して自分の達成感・使命感のためにやるのではないという基本スタンスを貫くこと。(40代、男性、会社員)

・時間、お金、費用の補助、安価な宿泊施設(7件)

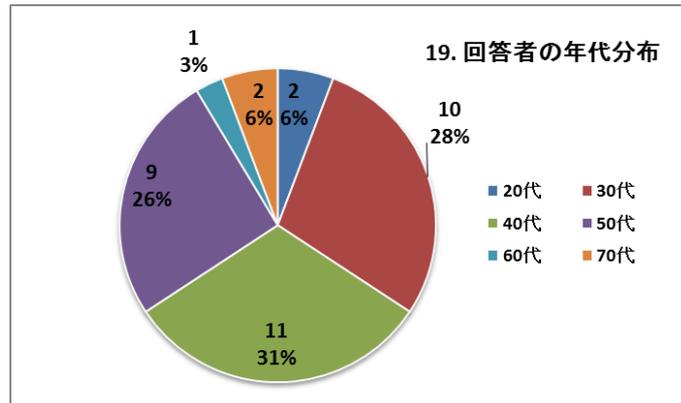
- ・ 金銭的余裕。仕事(平日)有りでも土日の活用。(70代、男性、その他)
- ・ やはり、時間やお金などは必要だと思います。(50代、男性、自営業/フリーランス)

・その他

- ・ ボランティアセンター間の横のつながり／・他者からの認知と賞賛／・人とのつながり(以上、各3件)
- ・ ニーズの引き出しと対応／・再訪を促す受け入れ態勢／・笑顔で心にゆとり・楽しく活動(以上、各2件)
- ・ 活動地域への愛着／・活動への誇り／・学校での教育／・家族の理解／・協力第一／・交通の便のよさ(以上、各1件)

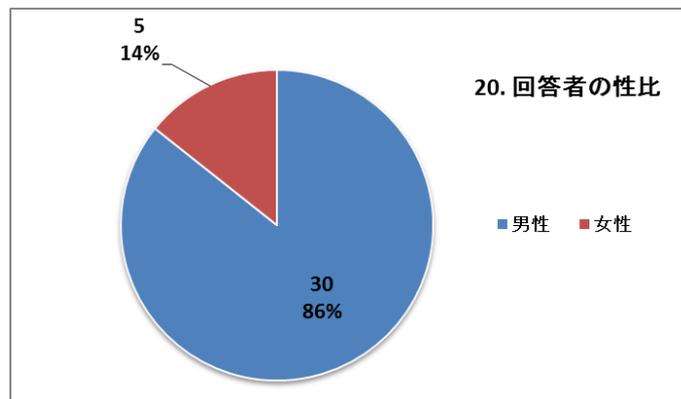
NO.19 回答者の年代分布

19. 回答者の年代分布	
20代	2
30代	10
40代	11
50代	9
60代	1
70代	2
合計	35



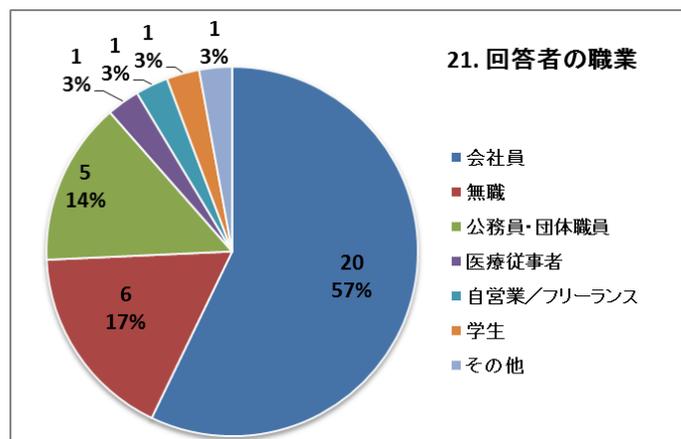
NO.20 回答者の性比

20. 回答者の性比	
男性	30
女性	5
合計	35



NO.21 回答者の職業

21. 回答者の職業	
会社員	20
無職	6
公務員／団体職員	5
医療従事者	1
自営業／フリーランス	1
学生	1
その他	1



7.3 団体、企業へのアンケートより

7.3.1 ボランティア参加団体や企業へのアンケートの実施

本報告書の作成にあたり、継続して七ヶ浜町ボランティアセンターへボランティアの派遣ならびに、各種活動にご協力いただいた団体や企業の方に、七ヶ浜を選んだ理由や、活動後に感じた印象などについて、アンケートを実施した。件数が限られるので、ここでは回答をほぼそのまま掲載させていただく。

1. アンケートの実施時期

2013年11月～2014年1月

2. 実施方法

アンケートフォームを郵送、FAX、メール等でご担当に送りし、同様の手段で回答を得た。

7.3.2 団体、企業からのアンケートの回答（敬称略）

◆ 大学生協ボランティアセンター

1. 七ヶ浜町をボランティア活動の場所として選ばれた主な理由を教えてください。

震災直後、活動先について宮城県社会福祉協議会に相談したところ、まだ団体の受け入れを行っていない、七ヶ浜町災害ボランティアセンターに入ってはどうかとの提案を受けた。

2. 他の被災地域でボランティア活動をしましたか。ある場合、場所を教えてください。

松島市東、南三陸町（今後名取市での活動予定あり）

3. 七ヶ浜町ボランティアセンターで活動して皆様が感じたことや印象に残ったこと。

対応が柔軟。他のボランティアセンターよりも受入体制が整っている。

◆ 株式会社 ネクスコ・エンジニアリング

1. 七ヶ浜町をボランティア活動の場所として選ばれた主な理由を教えてください。

(株)ネクスコ・エンジニアリング東北は、東日本高速道路(株) (NEXCO 東日本) のグループ会社です。また、NEXCO 東日本は、日本道路公団が民営化してできた組織です。

七ヶ浜ボラセンで活動しておられた高橋勇氏は道路公団 OB であり、高橋勇氏から七ヶ浜での活動状況をお聞きしたのがきっかけです。

※最初のボランティアは、水仙の植え付けだったと記憶しておりますが、個人的には自分の専門的知識（造園学）が役に立つところもあるのでは、という気持ちもありました。

2. 他の被災地域でボランティア活動をしましたか。ある場合、場所を教えてください。

当社としてのボランティア活動の場は下記のとおりです。

- ・岩手県釜石市
- ・福島県南相馬市

3. 七ヶ浜町ボランティアセンターで活動して皆様が感じたことや印象に残ったこと。

- ・ボランティアの受け入れ体制がしっかりしている感じを受けた。
- ・スタッフの皆さんが『暖かい』印象。
- ・数多くのボランティアの受け入れと、その作業のマッチングを非常に効率的に進めている。

◆ NPO法人 あっちこっち

1. 七ヶ浜町をボランティア活動の場所として選ばれた主な理由を教えてください。

震災後、私どもが現在行わせて頂いているカフェ・コンサートが、実際にその時点でお役に立つかわからず、東北の色々なボランティアセンターにお電話させて頂きました。そして平成 23 (2011) 年 7 月ごろ、七ヶ浜ボランティアセンターさんにお電話した際、快くお引き受けくださったので、今も活動させて頂いています。

2. 他の被災地域でボランティア活動をしましたか。ある場合、場所を教えてください。

福島県いわき市

3. 七ヶ浜町ボランティアセンターで活動して皆様が感じたことや印象に残ったこと。

とくに初めてボランティアセンターにお伺いしたとき、私たちも受け入れられるか不安がとももありましたが、スタッフの皆様がとても親切に対応してくださったので、安心して活動が出来ました。

七ヶ浜ボランティアセンターが今も続いていて、沢山のボランティアさんが集まるのは、スタッフの方たちの対応がとても清々しくて、居心地が良い (!?) からだと思います。

◆ アミイファクト 株式会社

1. 七ヶ浜町をボランティア活動の場所として選ばれた主な理由を教えてください。

当時、山元町担当の宮城県社会福祉協議会様のご依頼により。

2. 他の被災地域でボランティア活動をしましたか。ある場合、場所を教えてください。

岩手県陸前高田市
宮城県石巻市牡鹿半島
宮城県仙台市若林区
宮城県亘理郡山元町

3. 七ヶ浜町ボランティアセンターで活動して皆様が感じたこと。

センター職員の皆様には大変お世話になりました。

スケジュール管理もしっかり出来て活動しやすかったです。

ボランティアリーダーの皆様それぞれのやり方が異なり困惑したことがあります。

◆ サッポロビール株式会社

1. セケ浜町をボランティア活動の場所として選ばれた主な理由を教えてください。

知り合いからの紹介。

他の地区と比べてメディア等の露出が少なく、気になった。

最初にお会いした遠藤さんの一生懸命な姿と、ボランティアを実際に行っている方々を拝見して決めた。

2. 他の被災地域でボランティア活動をしましたか。ある場合、場所を教えてください。

南三陸町

女川町

石巻市浦戸諸島

気仙沼市

3. セケ浜町ボランティアセンターで活動して皆様が感じたことや印象に残ったこと。

ボランティアをされている方々が、何回も来られているのを見て頭が下がる思いでした。

周りをしっかり見られていないからだと思いますが、住民の考え方・思い等がもっとわかれば良いと思います。

既存の考え方・行動から抜け出せていない団体等あるような気がします。

より一層の情報発信が必要。

自立しようという行動等が更に見えると、気持ちよく活動できるのではないかと。

◆ 丸紅株式会社

1. セケ浜町をボランティア活動の場所として選ばれた主な理由を教えてください。

協業した特定非営利活動法人「日本 NPO センター」が宮城県災害ボランティアセンターと調整した結果、セケ浜町に決定。松島付近に営業を再開したホテルが多いとのことで宿泊先が先に決定し、宿泊地をもとに活動場所が決定した。

2. 他の被災地域でボランティア活動をしましたか。ある場合、場所を教えてください。

セケ浜町以外での実施はなし。

3. セケ浜町ボランティアセンターで活動して皆様が感じたことや印象に残ったこと。

・町役場・公共施設が高台に集中しており損壊を免れたことは、大量のボランティアの受入を可能にしたと思う。屋内に大量の人員を収容できる施設があったことは大変恵まれていた。とくに水道が無事であった点は、企業ボランティア事務局にとって非常に心強い条件の一つであった（当時は報道によって不衛生な環境が強調されており、覚悟して向かう社員も多かった。）

・(他の市町村との比較は難しいが) ボランティアセンターは非常に効率よく運営されていると思う。また、資材や車の提供者・センタースタッフ・現場リーダーといった人たちの善意が活動を支えていると感じた(これらがなければ我々ボランティアの受け入れは実現できていない。)

・ボランティアによる地道な活動の積み重ねに意義を感じる社員が多くいる一方、国による支援がもっとあって良いのではという感想も多かった。

◆ 佐賀県唐津市立海青中学校(旧呼子中学校)

1. 七ヶ浜町をボランティア活動の場所として選ばれた主な理由を教えてください。

地元 NPO 法人の事業の 1 つとして、旧呼子中学校の生徒が参加しました。

いきさつは学校ではわかりません。

2. 他の被災地域でボランティア活動をしましたか。ある場合、場所を教えてください。

ありません

3. 七ヶ浜町ボランティアセンターで活動して皆様が感じたことや印象に残ったこと

「百聞は一見にしかず」のとおり、新聞やテレビで見たり聞いたりするのでは本当のことはよくわからないと思いました。経験してみても初めて分かることが多いと感じました。実際に参加した生徒も同じような感想を持っていたようです。また、全国からボランティア活動に参加している人々をみて、自分たちも何かできることはないかと考えることが、ボランティア活動の第一歩だと思いました。七ヶ浜の人々には敬服します。まだまだ復興には時間がかかりますが、皆様のご健康とご多幸を祈っています。

◆ 山形市立第六中学校

1. 七ヶ浜町をボランティア活動の場所として選ばれた主な理由を教えてください。

・学校の調査や問い合わせで、生徒 300 人の活動を受け入れていただける場所が見つからなかった。

・旅行会社の「トップツアー」を通じて、受け入れていただける場所を調査していただいた。

・「トップツアー」が「みやぎ観光復興支援センター」を通じて、七ヶ浜町での活動について、調整していただいた。

・学校による七ヶ浜町の事前の調査と研修により、生徒の体験的な学習・活動の場として最適であると判断した。

・本校「いのちの教育推進に関する覚書」を七ヶ浜町社会福祉協議会と締結できたことで、毎年の活動の場としたい。

2. 他の被災地域でボランティア活動をしましたか。ある場合、場所を教えてください。

・本校の生徒の規模を受け入れていただけるのは、現在、七ヶ浜町しかない。

・「覚書」を活用するため、七ヶ浜町以外での活動は考えていない。

3. セツ浜町ボランティアセンターで活動して皆様が感じたことや印象に残ったこと。

- ・ボランティアリーダーの方々の意識の高さに、感銘を受けている。そういった方々の豊かな個性を感じた。
- ・全国から集まるボランティアとの交流が、新たな世界の発見となった。
- ・田圃の瓦礫を手拾いしている最中に、ぬいぐるみや幼稚園児の通園バッグ等が見つかったときの、生徒たちの神妙な姿。
- ・作業した田圃から、米の収穫ができたこと。
- ・セツ浜町で活動したことが、生徒たちにとって「自信」と「誇り」になっていること。

◆ ながでん(長野電鉄)東日本復興支援ボランティアツアー

1. セツ浜町をボランティア活動の場所として選ばれた主な理由を教えてください。

我々は信州からのボランティアです。活動場所は下記の条件がありまして選定しました。

- ・長野からの活動場所の地理的条件が合致した。
- ・日程的に3日間、実施できる範囲のボランティアの活動場所であること。
- ・受け入れ態勢が良かった。他の場所では中々、団体を受け入れが難しかった。
- ・ボランティアの活動場所の実情では団体受け入れが中々難しい中で、常に受け入れて頂いたから。

2. 他の被災地域でボランティア活動をしましたか。ある場合、場所を教えてください。

多賀城市、東松島市、石巻市、仙台市（若林区荒浜）、南三陸町

3. セツ浜町ボランティアセンターで活動して皆様が感じたことや印象に残ったこと。

- ・朝のマッチングではボランティアを受け入れる体制が良くできていて素晴らしかった（とくにボランティアチームの紹介・ラジオ体操・地元農家の方等の御礼の挨拶等）。
- ・ボランティアリーダーが常に最初から最後まで指導と安全確認をして頂いたこと。
- ・挨拶が常に明るく、受け入れる心がセンターの皆さんに感じられた。
- ・帰路に着く時の「お見送り」には参加者が皆さん感動していた。
- ・参加者の皆様が「また来たい」と言う気持ちが湧いたようです（リピーターが多くなった要素）。

◆ 徳島県つるぎ町

1. セツ浜町をボランティア活動の場所として選ばれた主な理由を教えてください。

- ・インターネットにより「浜を元気に復興ボランティア」の活動を知り申し込んだ。
- ・震災後、徳島県が宮城県を支援していたため本町でも宮城県内の活動場所を探していた。

2. 他の被災地域でボランティア活動をしましたか。ある場合、場所を教えてください。

- ・平成23(2011)年3月20日 南三陸町へ緊急物資支援（日用品と食料）
- ・平成23(2011)年4月25日～26日 石巻市で炊き出し（25日の昼食と夕食、26日の朝食）

と昼食)

3. 七ヶ浜町ボランティアセンターで活動して皆様が感じたことや印象に残ったこと。

・全国から寄せられるボランティアニーズに対応すべく、マッチング作業を完璧にこなしていた。また、ボランティアによる活動を通じて浜を元気にするという熱意を感じた。

・ボランティア活動を通じ、七ヶ浜のファンが全国に広がったことから、町が完全復興すれば全国から集まったボランティアの方々を通じ、新たな町づくりにチャレンジするきっかけになることと思う。

・予算、人事交流、権限など町と社会福祉協議会・ボランティアセンターとの連携の難しさを感じた。

◆ 株式会社 保安企画

1. 七ヶ浜町をボランティア活動の場所として選ばれた主な理由を教えてください。

企業としてボランティア活動をさせて頂きました。全国の社員を宮城県に呼び参加出来る事、また、被害が甚大であった事より参加させて頂きました。

2. 他の被災地域でボランティア活動をしましたか。ある場合、場所を教えてください。

仙台津波復興支援センター（旧岡田サテライト）にてボランティア活動。仮設住宅やみなし住宅へ、プリザーブドフラワー（宮城県 430 個、岩手県 700 個）やアイスクリーム（400 個）、衣料品の配布、風評被害にあわれた野菜購入（300 万円）など

3. 七ヶ浜町ボランティアセンターで活動して皆様が感じたことや印象に残ったこと。

・震災後、私が知っている七ヶ浜とは、まったく異なり非常に悲惨な状況でしたが、訪問させて頂くたびに瓦礫がなくなり、田んぼに稲が戻り、嬉しく思います。（今年、七ヶ浜で販売された「復興米」。今年は購入する事が出来ませんでした。もし、来年も販売のご予定がある場合、個数はまだ決定しておりませんが購入を希望致します）。

・七ヶ浜ボランティアセンターでは、スタッフの方々の御対応の良さ、団体でお伺いさせて頂くにあたりまして非常にやり易く感じました。

私は、仙台市内に住んでおりますが、他県からの応援が多く感謝の気持ちで一杯になりました。

震災より日にちが立ちますが、今後の復興も大事です。引き続き「何が出来るのか」を考え、社協の皆様とご相談し、対応させて頂きたいと思っております。

◆ クラーク記念国際高等学校(クラーク高等学院仙台校)

1. 七ヶ浜町をボランティア活動の場所として選ばれた主な理由を教えてください。

震災後に、高校生たちが活動できるボランティアは限られていました。直後は、お世話になった避難所で炊き出しや足湯、物資の運搬などの活動を行っていましたが、避難所が縮小し閉鎖してからは、地元仙台での活動を考えていました。が、高校生の受け入れは難しく、また 2,3 名程度などの人数制限もありました。そんな中、七ヶ浜町ボランティアセンターだけが高校生のボラ

ンティアを快く受け入れて下さったので、継続して活動していくことを決めました。また、活動していく中で、重機ではなくマンパワーで復興をしていく姿に感銘を受けたので、高校生たちにもその想いを感じ受け継いでもらいたいと感じました。セヶ浜町から通学している生徒もいるので、高校生にとっても身近な地域です。

2. 他の被災地域でボランティア活動をしましたか。ある場合、場所を教えてください。

石巻市、気仙沼市、岩沼市、名取市、仙台市、南三陸町

3. セヶ浜町ボランティアセンターで活動して皆様が感じたことや印象に残ったこと。

・ボランティアセンターの縮小

ボランティアセンターが縮小し、少しずつ大人数のボランティアさんも減ってきた様子を実感したときに、地域の復興の力を感じました。そして震災から年月が経ったことを改めて感じました。ボランティアセンターが地域の方の憩いの場になっていて、お茶を飲みにきたり、お話しにきたりする方を見て、うれしく感じました。

・なかなか変わらない現状

震災後1年も経っていない頃の活動では、瓦礫撤去や仕分けなどで、毎回参加するたびに一面更地の土地をみて、復興していくことの大変さと時間の速さを感じました。ボランティアセンターに行くまでの道路脇の広大な土地がずっと変わらないように感じて、高校生たちはいつも「なんとかできないかな」と口にしていました。

・農地をお借りできたこと

高校生の力は、正直微々たるもので、大人や企業や行政の動きからみると、本当にちっぽけだなと思います。でも、彼らの若さと想像力は素晴らしくて、自分たちにできることで少しでも貢献できることを考えました。なかなか緑が増えない現状を見て、自分たちで作物を育て、販売して、その売上げを寄付する道を考えました。そんな彼らに力を貸して下さった遠藤さんをはじめ、ボランティアセンターの皆様には本当に感謝しています。ご迷惑をおかけしたこともたくさんあり、高校生たちもくじけそうになることも多々ありましたが、農地をお借りできて活動したことで、継続することの難しさと大切さを学んだと思います。本当にありがとうございました。

◆ 仙台コカ・コーラボトリング株式会社

1. セヶ浜町をボランティア活動の場所として選ばれた主な理由を教えてください。

震災があった年(2011年)の10月22日、高浜海水浴場、菖蒲田浜付近の松林にて、日本コカ・コーラ社及び当社社員、総勢37名が海岸清掃ボランティア活動に取り組んだことがきっかけとなり、2012年は当社創業50周年という節目の年でもあったことから、「地域の発展なくして当社の成長はあり得ない。社会から信頼される会社を目指し、社会との共存共栄をはかり、感謝と奉仕の精神をもって活動する。」という当社の経営理念に立ち返り、5月9日から6月15日にかけて、弊社社員約370名がセヶ浜町の田畑の瓦礫撤去などの作業を中心にボランティア活動に取り組みました。ボランティアセンターの皆様には、活動期間中、連日のマッチング作業や活動リーダーの派遣など、充実した活動ができるようにしっかりとサポートいただけましたこと、改めて心よ

り感謝申し上げます。本当にありがとうございました！

2. 他の被災地域でボランティア活動をしましたか。ある場合、場所を教えてください。

2011年6月27日、東松島市にて、日本コカ・コーラ社及び当社社員、総勢69名が大曲小学校付近の民家周辺及び陸前小野駅付近で、主に道路脇側溝の泥のかき出し作業に取り組みました。また、2013年には、5月13日から5月31日にかけて、南三陸町にて当社社員約220名が農業復興支援、漁業復興支援に関わるボランティア活動に取り組んでおります。また、同年6月22日には、東京コカ・コーラボトリング社及び当社社員、総勢46名にてJR気仙沼線歌津駅周辺で瓦礫撤去作業に取り組みました。

3. 七ヶ浜町ボランティアセンターで活動して皆様が感じたことや印象に残ったこと。

2012年5月から6月にかけての七ヶ浜町でのボランティア活動に参加した社員全員にアンケートを取ったところ、様々な声が寄せられました。その一部をご紹介します。

「田んぼの瓦礫片付けでしたが、衣類やハンガー、コップ、ビデオテープ、バッグ等、生活を感じさせるもの多くて、拾うたびに心が締め付けられる想いだっただ。」

「潮と土にまみれ、生地がもろくなった衣服の数々。胸がつまり、涙がこみあげてきた……。この体験を一生、語りつないでいきたい。」

「復旧・復興には相当な時間を要すると改めて思った。」

「次回は家族と一緒にボランティア活動に参加したい。」

「地元企業として復興のお手伝いをできたことに充実感と感謝の気持ちです。」

「一人ひとりの力は微力ではあるが、その力が結集して復興に繋がっていくと感じた。」

「作業後、この田んぼに稲穂が実った姿を一日でも早く見られるように、またボランティアに参加したい。」

◆ 七里ガ浜発 七ヶ浜復興支援隊

1. 七ヶ浜町をボランティア活動の場所として選ばれた主な理由を教えてください。

知り合いが居て震災後訪ねたのがきっかけ、その後、私が住んでいる七里ガ浜と名前地形が似ているといった話から、海で遊べるようになるまで復興支援をしようといった話しが上がる。

2. 他の被災地域でボランティア活動をしましたか。ある場合、場所を教えてください。

宮城県山元町、多賀城市、岩手県大槌町

3. 七ヶ浜町ボランティアセンターで活動して皆様が感じたことや印象に残ったこと

震災後、早くから支援活動が開始され、ボランティアセンターを始めとする地元の方々が、何事に関しても積極的に動かれているのを見て、支援者である私たちが生きる力を頂いた。また、支援がスムーズに行われるようにそれぞれの役割が非常に明確で、初めて支援、ボランティアに参加する者が動きやすい体制が整っていた。

7.3.3 所感（団体、企業からのアンケートの回答を受けて）

以下、アンケートの回答を受けて、所感をまとめて記す。

1. セケ浜町をボランティア活動の場所として選ばれた主な理由について

・ボランティアの受け入れの柔軟性

早い時期から個人、団体にかかわらず受け入れたことが考えられる。とくに大学生のみならず中学生、高校生等を受け入れたことが第一の理由と考える。ある高校では他のボランティアセンターでは全て断られ唯一、セケ浜だけが活動希望を受け入れたと聞かされた。

・地理的利便性

仙台市（主に仙台駅）から近いこと。また JR の仙石線が震災からわずか 2 か月あまりの 5 月 28 日には仙台駅～高城町駅が復旧。バスに関しては JR 多賀城駅から利用できる汐見台団地線ミヤコーバスが平成 23 年 4 月 11 日より土祝日便運行を開始。平成 23 年 4 月 25 日より通常運行。このことで公共交通機関のみでセケ浜町災害ボランティアセンターが結ばれたことは、ほかの被災地と大きく異なると考えられる。

2. 他の被災地域でボランティア活動について

複数の被災地域で活動されているが、被災一年目、二年目、三年目と受け入れ側に受け入れ態勢の縮小等の変化があり、一年を経過したころからセケ浜での活動を希望する団体が増えたと考えられる。他の被災地を視察しセケ浜町より苛烈な被災状況も見られたが、被災区域が広範囲のためにボランティア活動をマッチングするマンパワーが不足して対応できない状況を感じた。セケ浜町は面積が小さいことで詳細な状況把握がしやすく、ボランティア活動のマッチングが成功したのではと考える。

3. セケ浜町ボランティアセンターで活動して皆様を感じたことや印象に残ったことについて。

被害の現場はまさに「百聞は一見にしかず」の言葉どおりだったようである。「今から撤去するものは単なる“ガレキ”ではなく、被災された方がここで生活されていた証しであり、思い出のものです」という説明をすると、人形や生活感のあるものが出てきた時に、被災者の心情へ想いを巡らすことができ、貴重な体験であったようである。またボランティアセンターのスタッフやボランティアリーダーの対応は、一様に評価いただいていた。「被災地からの精一杯のおもてなし」は感謝を忘れずに、笑顔を忘れずに。

うみ、ひと、まち、セケ浜が理解いただいたのではと考える。

＜セケ浜町ボランティアセンター運営スタッフ 遠藤久和＞

<Memo>